日大二高　30歳の青年監督が率いる甲子園6度出場の西東京の伝統校 甲子園優勝監督のある行動に「勉強になりました」

日大二・齊藤寛文監督

数多くの強豪校がひしめく西東京。勝ち上がるのは容易ではないなか、存在感が際立ち始めているのが春夏合わせて6度甲子園出場を誇る日大二だ。

秋は都大会で初戦敗退の悔しい結果だったものの、夏は西東京大会ではベスト4進出。現チームの主将・瀧澤和也捕手などが3年生たちと一致団結して勝ち抜いて経験を積んだ。だからこそ、この1年は大きな意味を持つだろう。

甲子園優勝監督から学んだ、選手たちが話しやすい環境

「チームとしては非常にいい。去年よりも組織としては大きく成長しています。役割をしっかりと個々が果たしてくれますし、チーム理念も深く浸透してきました。おごりなどなく、よくなっていました」

チームを指揮する齊藤寛文監督も、今年のチームに対して手ごたえがあった。でも都大会の初戦・雪谷には3対10で敗戦した。「初戦の難しさですね」と齊藤監督は語ったうえで、「この秋はバッテリーを中心としたロースコアをゲームモデルにしていました。しかし、初戦では先に10点を取られてしまい、追いつく攻撃力が（今のチームには）まだありませんでした」と振り返った。ただ一方で、「この負けをどう活かすかで秋の大会に価値が生まれると思います」と前向きにとらえているようだ。

齊藤監督は、日大二を卒業して、大学在学中からコーチとして長く支えてきたが、2023年の春より監督に就任。長くチームを指揮してきた田中吉樹監督に代わって、伝統校・日大二の指揮官となると、いきなり結果を出す。

初めての大会に当たる春季大会こそ初戦で負けたが、夏の大会ではベスト16入り。世代交代した現3年生のチームでは秋と夏にベスト4進出。早くも結果を出したことで一躍注目を浴びた。

瀧澤主将いわく「自分たちに寄り添ってくれるような、かなり距離の近い監督さんです」と話すように、齊藤監督は個々のコミュニケーションを大事にしてきた。そこにチームを強化出来た理由があるようだ。

「田中監督は行動で示す。自分が先頭に立って背中で引っ張る、不言実行タイプでしたので、私はチームのバランスをとるうえでも、選手個々とのコミュニケーションをコーチ時代から大事にしてきました」と背景を語ったうえで、選手との対話を大切にしてきた理由を改めて話す。

「2021年ごろ、前橋育英の荒井直樹監督とつながりのある人がいたので、会わせてもらう機会をもらったんです。そのときの荒井監督の野球に対する姿勢は勉強になりました。
荒井監督は選手に対して、他愛もない話をしている姿があり、自然体でコミュニケーションを取っていたんです。そのおかげなのか、バッティング練習の際に、選手たちが積極的に荒井監督のところに質問へ行くんですよね。
毎日一緒に練習している監督に、選手から逐一何を意識しているなど相談する文化を醸成するのは非常に難しいことなんですけど、日々の些細なコミュニケーションがあるから、選手から本音が出てくる。向こうから報連相をしてくれるから、結果的に技術力も伸びやすく、成長に結びつくと思います。荒井監督との出会いで、より選手個々と些細なコミュニケーションを大事にするようにしました」

2013年に全国制覇を成し遂げ、現在はU-18代表のコーチとしても尽力する荒井監督。高校野球界で有名な指揮官の姿を見て、選手から「報連相が出来やすい環境を整える」ことの重要性を学んだ齊藤監督。だから練習中は限られた時間の中で出来るだけ全選手と対面でのコミュニケーションを取ろうと心がけている。

実際、瀧澤主将は捕手として「最近の投手陣の調子はどうなのか」であったり、「次の試合で先発させようと思っているんだけど」ということで、細かなコミュニケーションを取ることが多いという。

「優勝するくらいの勢いで」 春への逆襲誓う

次のページを読む »

1 2

「優勝するくらいの勢いで」 春への逆襲誓う

とはいえ、指揮官として練習全体を見渡す必要もある。もちろん、コーチ陣は数名おり、齊藤監督1人で全ての指導をするわけではない。でも、伝えるべき時は選手個人に対してはもちろん、チーム全体に向けて指導するべき時もある。だから、選手たちにはチームスローガンである「自主創造」を体現することの重要性を強く感じている。

「最初の佐藤（慎平）主将の世代は、『次は何をしますか。次はどうしますか。今日は何をしますか』と全て聞いてきたんですよね。去年の樋口（結）主将の世代は、自ら考え、自ら行動する意識はついたのですが、報連相などの組織で大切な部分は欠如していました。そして、瀧澤の世代になり、秋の大会は初戦で負けてはしまいましたが、組織として大切なことを選手一人ひとりが理解し、チーム文化として浸透してきたことは確かです。
一方でこの秋は、チーム全体への指導に偏ったことで、選手個々への指導が疎かになっていたことも事実です。コーチ時代に大切にしていた、選手一人一人との対話が欠如していました。真の自主創造とは、選手主体でもなく、指導者主体でもなく、その中間にある対話で生み出される無形のものであると、この秋を終えて気づきました」

瀧澤主将も齊藤監督は同意見のようで、ともに戦っていたからこそわかる先輩たちの強さを振り返る。

「先輩たちは我が強かったですし、かなり意見をぶつけ合っていたんですよね。人数は15人でしたが、それくらい1人1人の気持ちが強かった。それでいて、選手個々がしっかりと役割をこなして、全てが上手くはまった。だから結果が出たと思うんです」

1人1人が高校生として自主自立、そのうえでしっかりとプレーで結果を出す。そうしたことの連続が、チームとしての結果に繋がる。だからこそ、選手個人をいかに鍛えられるか。冬場の課題は、そこにあると齊藤監督は考えている。

「組織力なら十分戦えるように整ってきていますが、個の能力を伸ばしていかないと、発揮できるパフォーマンスが増えてこない。だからコーチ陣とのコミュニケーションは密に取り合って、選手の課題や指導したことなどを棚卸しをして、共通認識をもって個々の選手指導にあたっています。
高校生を指導するうえで大切なのは、やはりチーム理念だと思っています。日大二のチーム理念を一言でいうと「幸せと教育」です。理念がチームを結束させて、チームにかかわるすべての人の指針になります。『この野球部でよかった、このメンバーと野球ができてよかった』と心の底から思って卒業してもらうことが一つのゴールです。
人に決められた人生では幸せは感じられません。指示待ちの人には大きな仕事は入ってきませんし、社会に貢献することはできません。チーム理念を成し遂げるためには、チームのスローガンである『自主創造』が必要不可欠になってきます。こういった組織のメンバーは自己有用感が高く、個も伸び、組織としても伸びていくと思います」

瀧澤主将も、「自分がやるべきことをやって、1点ずつ取る。その点数を投手陣を中心に守っていければ勝てると思います」と選手個々がしっかりと結果を出すことで、チームとしての勝利が近づいて来ると考えている。

そのうえで、西東京を勝ち抜くことのポイントに、「勝負強さ、意地というのが出てこないとやっぱり勝てない」と1球に対する執念をもって取り組むことが、春以降の鍵だと考えている。

だからこそ、瀧澤主将は春に対する思いは強い。

「主将として何が出来るかといわれたら、先頭に立って結果を出すこと。そうしなければ顔は立たないですし、周りはついてきません。秋の初戦敗退の悔しさもあるので、春は悔しさをぶつけて、春はベスト4以上の結果、優勝するぐらいの勢いで戦いたいと思います」

齊藤監督が就任したとき、瀧澤主将たちが入学してきた。齊藤監督の1期生というわけだ。3年間指導した成果がどんな形で結実するか。30歳の青年監督、勝負の春、そして夏の戦いは見逃せない。

取材・文　　田中裕毅

前のページを読む »

1 2